
ソードマギカ†オンライン

椎名咲良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードマギカ+オンライン

【Nコード】

N8800Z

【作者名】

椎名咲良

【あらすじ】

クリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは現実世界での“死”を意味する。

VR技術を用いた世界初のMMO《ソードマギカ・オンライン（SMO）》のオープンテストに参加した約一万人のユーザーと共にその過酷な戦いが幕を開けた。

妹と共にSMOに参加していた主人公、サクヤは妹のフウカと共に

何とかこの世界から脱出すべくいち早く運命を受け入れる。

そして、ゲームの舞台となる魔法と剣が支配する異世界プリスティア・リユミレースの中央に位置する世界樹の最上階を目指す攻略最前線で戦うコンビとして頭角を表していった。

クリア条件となる最上階到達を目指して日々熾烈な戦いを続けるサクラ達だったが、ひよんな事からウィザード職の頂点と評判の女魔導師ユキナとチームを組む事になり。

プロローグ（前書き）

定番物もいいところの定番です。初の王道？ファンタジーになります。

そこまで高いクオリティではないですが、楽しんでもいただけると嬉しいです。

ブローグ

無限に広がる広大な大地。この世界でしか見る事が出来ない景色だ。

どのくらい広いのか計ってみようと考えた観測スキルを持った酔狂な一団が三ヶ月にも渡る調査を行った結果、面積はおよそ二千五百平方キロメートルという事がわかった。

地球最大の大陸であるユーラシア大陸が五千四百九十二平方キロメートルなのだから、その総データ量は推し量れない。

大地の各所にはいくつかの大都市と小規模な街や村、森や洞窟、海に湖が存在する。

そして、世界の中心に位置する《世界樹》。

内部は迷宮になっており、百階までであるとされている。

その頂上に到達し、そこに存在するとされる《楽園》で魔物を封印する事がプレイヤーの目的となる。

その世界の名前はプリスティア・リュミレース。

そのゲームの名は ソードマギカ・オンライン。

紅蓮の輝きを放つ閃光が突進して来る。

漆黒のコートを身に纏う少年　サクヤはその閃光が肩に当たった事に舌打ちすると、視界の左上に表示された青色の細い横線に視線を向ける。

その横線　HPバーはサクヤの生命の残量を視覚化したものだ。まだ八割近い数値が残っているが、油断は出来ない。目の前に立つ人型エネミーからモロに攻撃を貰えば、一瞬で全損する可能性も大いに有り得るからだ。

操られたウィザード《レベル72》が再び詠唱を開始しようと杖を構えた瞬間、サクヤの数メートル後方に立つ淡い水色のローブを身に纏う少女から放たれた滑らかなソプラノボイスが薄暗い迷宮に木霊する。

「《サイレス》！」

マギカ
魔法。

いくつかのキーワードを詠唱という形で口ずさみ、HPバーの下に表示された緑色の細い横線　MPバーを消費する事で発動する神秘の力。

今発動した《サイレス》は、対象の魔法を一定時間使用禁止にする能力弱体化魔法効果を持った魔法だ。

その効果を受けて詠唱が出来なくなつて棒立ち状態のウィザードはもはや的以外の何者でもない。

「《シルフィード》！」

直後、サクヤの身体を風が包み、サクヤは自分自身の身体が急激に軽くなるのを感じた。

《シルフィード》は風属性の補助魔法で、使用者の移動速度を一定時間だけ速くする効果を持ち、尚且つ詠唱が必要ないサクヤのお気に入りの魔法だ。

「っ！」

足に力を入れて地面を蹴ると、その驚異的なスピードで一気に無防備なその懷に飛び込むと、その手に握られた漆黒の刃が黒光りする。

このゲームの最大の特徴。それは、魔法と剣技が融合したスキル
ソードマギカ
魔法剣技の存在にある。

この世界の魔物 エネミー達は魔法を使わなければ倒す事が出
来ない。

魔法を主とするウィザードは素直に魔法で倒せばいいのだが、剣を主とするソードマスターはそうはいかない。

ウィザードは剣技の取得が、ソードマスターは魔法の取得条件が厳しいのが原因に上げられる。そこで、ソードマスターも敵を倒せる様にと考案されたのが魔法の力を持った剣技 ソードマギカな訳だ。

「《ブラック・ロータス》！」

闇属性魔法と融合した高速連撃、《ブラック・ロータス》が炸裂する。

漆黒の刀身の黒光りするライトエフェクトはソードマギカが発動

している証。発動し、照準さえ合わせれば、後はシステム側がスキルに設定された動きを再現する。

その効果は射程範囲に入っているエネミーを一体でも複数でも高速連撃で切り刻む。名前の通り、一回斬る度に刀身から散って行く黒のライトエフェクトが散りゆく黒い薔薇の花びらを感じさせる。

「トドメ……だッ！」

最後に有りつたけの力を込めてエネミーを真つ二つに両断する。

その一撃で、エネミーの頭上に表示される微かに残っていたHPバーがドットも残さず消滅し、その身体を形作るプログラムデータが四散する。

これが、この世界における《死》の形。死体という痕跡は残る事なく、まるでそこに最初から何もなかった様に跡形もなく消滅する。

視界の中央に真四角のウィンドウと共に浮き上がったドロップアイテムリストを一瞥して剣を腰の鞘に収めると、緊張の糸が切れたのか迷宮の壁に体重を預けながらずる崩れ落ちる様に座り込むすると、目の前に白い手と共に体力回復アイテムであるポーションではない、普通の水が入ったビンが差し出された。

淡い水色の長髪と同じ色のローブを身に纏った少女は顔立ちこそ幼いが、そのローブを押し上げる豊かな膨らみだけは立派に女性を感じさせた。

「お疲れ様。お兄ちゃん」

「ああ。フウカもお疲れ」

「私、今回はサイレス唱えただけでほとんど何にもしてないけどね」

そう苦笑い気味に語るフウカは「ふああ……」と小さな欠伸を一つ。

視界右上に小さく表示された時刻表示は、すでに午前0時を指し

ていた。

迷宮に潜って既に三時間という長時間が経過している為、流石に回復ポーションも少なくなってきたているし、無理は出来ない。それこそ無茶をして過労で気絶した所をエネミーに襲われて死ぬ事態だけは絶対に避けなければならない。

「……帰るか」

「うん。そうしょ」

フウカが頷いたのを確認して、ゆっくりと立ち上がる。

今日も無事、生き残る事が出来た。しかし、ねぐらに戻って休息を取れば、すぐに次の戦いが訪れる。

このサイクルを繰り返していれば、死ぬ確率がゼロではない以上、いつかは確率論の問題で死神のカードを引き当てる事になるだろう。問題は、それを引き当てる前にこのゲームを無事にクリアする事が出来るか、という事だ。

迷宮の出口を目指して二人で歩きながらサクヤはふとあの日の事を思い出していた。

一年前。ゲームが遊びではなくなった時の事を。

ミンミンと蝉の鳴き声が窓の外から聞こえて来る。

時刻は既に午後七時になる所だがまだ外は明るく、まさに夏真っ盛りといった所だ。

部屋の主である雀宮咲夜が黒のTシャツに黒の短パンといった見るからに夏の部屋着という格好で自作した愛用の高スペックデスクトップの画面を食い入る様に見つめていると、こんこんと部屋の扉を叩かれる音がした。

こんな時間に咲夜の部屋を訪ねてくる人物は一人しかない為、扉の向こうに聞こえる様な声で相手の名前を呼んだ。

「風花^{フウカ}か？ 入っていいぞ」

直後、がちやりと扉を開けて、ワイシャツに灰色のチェックスカートという制服姿の妹、雀宮風花^{スズミヤフウカ}が部屋に入ってきた。

「ありや^アりや……バレてたか」

「そりやな。この家、今俺とお前しかいないし」

「ちとせさんがいるよ？」

「オコジ^{オコジ}ョじゃねえか」

言ってから一匹のオコジョの事が咲夜の脳裏に浮かぶ。

ちとせさんというのは、ある日風花が拾ってきたオコジョの名前だ。何故か風花と母親にだけは懐くが咲夜と父には懐かないという

雄の習性がこれでもかという程押し出された性格な為、雀宮家の男性陣　咲夜と父からはとことん嫌われている。だが、雀宮家の女性陣　風花と母にはとことん好かれている為、手出し出来ないという状況が続いて早二年。今となつてはそんな事よりも風花は一体何処でオコジョなんか拾ってきたのかという事と、何で名前が《ちとせさん》なのかの方が重要な問題に感じられるくらいには落ち着いてきている。

ちなみに、両親は咲夜を産んでもう十七年、風花を産んで十四年経つというのに未だに新婚の様なラブラブりで、この夏は風花に家事を任せて二人きりで旅行に行つてたりする。

咲夜は溜息を吐いて視線をディスプレイに戻すと、そのまま尋ねた。

「てかお前何で制服？」

「今日学校で夏期講習だったの。優等生としては参加しとかないなーと」

「キャラ作りご苦労さん」

風花はどうやら学校では優等生キャラで通つてらしく、そのキャラ作りは徹底されているの一言に尽きる。

宿題は絶対忘れず予習復習は必ずやる。テストは毎回学年トップクラスで生徒会の副会長。おまけに伊達眼鏡までする始末だ。

容姿端麗成績優秀運動神経抜群家事万能とまさに並べてみれば何の暗号かと思える程に漢字が並ぶ。そんな訳でもちろん人気も高く告白もよくされるらしいのだが、父と母に似たのか咲夜と風花には既にブラコンシスコンの包囲網が完成しており、毎回「お兄ちゃんの方がカッコいい」と言つてバツサリ斬り捨てていると聞いた時、表面上は溜息を吐いていたが、内面では咲夜も何時か告白される日が来たら、「妹の方が可愛い」と言つてみようかなと考えていたりした。

世の中仲が悪い兄妹が多い中で、雀宮家は実に良好な兄妹関係が保てているのが、二人の密かな自慢だったりする。

「それで、何の用だ？」

「えっとね、夕飯出来たから呼びに来たの」

「後で食ってから先食っててくれ」

ディスプレイから視線を外さずにひたすらページをスクロールしていく咲夜に風花は溜息混じりに尋ねる。

「……さっきから私の顔も見ないで一体何見てるの？ エロサイト？」

「違うわアホ。これだよこれ」

風花は、手招きされて咲夜のデスクトップPCのディスプレイに表示された記事を覗き込む。

世界初！ VR技術を用いたMMORPG、ソードマギカ・オンライン（SMO）が正式発表！

「ああ。何か凄いつてニュースとかで話題の奴？ 本当、お兄ちゃんも好きだねえ」

「仕方ないだろ。好きなもんは好きなんだし」

「別に悪いなんて言っていないよ。お兄ちゃんが根っからのゲーマーなのは昔から知ってるし」

口を尖らせる咲夜をフォローしてベッドに腰掛けると、改めて兄の部屋を見渡した。

風花の女の子らしいぬいぐるみやファンシーで可愛い家具類でまとめられた部屋とは違い、所狭しとPCやプログラムの参考書

等が置かれた飾り気のない部屋。

男の子の部屋って皆こんなものかなと一人納得してから、風花は答えがわかっていながらも尋ねた。

「ねえ、お兄ちゃん。やっぱりそれもプレイするの？」

「ああ。もちろんそのつもりだけどさ」

そこで咲夜がはあ、と深い溜め息を吐いたのを見て風花は「あれ？」と小首を傾げた。

普段なら自称ネトゲ廃人を語る咲夜にその手の話を振れば、間違はなくノリノリでそのゲームの魅力を語って来るはずなのだが、初めて溜め息だけが返って来る結果となったのが意外なのだ。

「ど、どうしたの？何かあった？」

「いや……プレイしたいのはやまやまんだけどさ、この話題性だろ。プレイ出来そうにないなって」

「あー……それは確かに」

今時珍しく、ニュースにも取り上げられるくらい話題のゲームなのだ。一般タイトルの様に簡単に手に入る訳がない。

あまりそういった物には詳しくない風花には何がどう凄いのかは想像もつかないが、咲夜からすればそれこそ喉から手が出る程欲しいのは間違いないと確信出来た。

「お兄ちゃん。そのソードマギカ・オンラインって何が凄いの？ニュース見ても私にはよくわかんないんだけど」

「そうだな……風花はVRって知ってるか？」

「さつきニュースでやってたから単語だけなら。Virtual Realityの略だって言ってた」

正解、と頷くと咲夜はPCを操作してソードマギカ・オンラインのティザーサイトを開いて見せた。

ティザーサイトとは、発売前の新製品に関する断片的な情報のみを公開し、閲覧者の興味を引くことを意図したプロモーション用Webサイトの事だ。断片的な情報　つまり、ゲームの大まかなシステムや世界観なんかを紹介している為、そこを見れば大体どんなゲームなのかを掴める様になっている。

「VR……日本語に直すと仮想現実って言うんだけど、それってようつるに、普通はないものがあるように見せる技術なんだ」

「……つまり、どういう事？」

「キャラクターをコントローラーで操作するんじゃなくて、自分がキャラクターとして動いて剣振って魔法使ったり出来るって事」

それを聞いて、今度こそ風花は「へえー！」と感心した声を上げた。

自分で剣や魔法を使って敵を倒す。ゲームをやれば誰もが一度は憧れる事がこのソードマギカ・オンラインでは出来るというのだ。

確かにそんな夢みたいなお事が出来るなら、これだけ話題になるのも納得出来るだろう。

「はあ……ティザーサイトなんて見てたら余計に欲しくなるなあ」

咲夜が深い溜め息と同時にブラウザを閉じるのを見て、風花はズレにズレた話の軌道を修正すべく口を開く。

「じゃあお兄ちゃん、一段落した所でそろそろご飯冷めちゃうから早く行こ？　今日のはちょっと自信作なんだから！」

「ああ。PC落としたらすぐ行くから先に行つててくれ」

「うん。じゃあ先行ってるね」

風花はベッドから腰を上げて咲夜の部屋を後にすると、真っ直ぐ一階のリビングには向かわずに隣にある自分の部屋の扉を開く。

飾り気のない咲夜の部屋とは正反対の可愛らしくレイアウトされた部屋の中央に置かれた小さな丸机の上に置かれた同じゲーム雑誌を二冊手に取る。

「……ソードマギカ・オンライン、か」

誰にでもなく呟く風花の視線は、雑誌の表紙に書かれた大文字に向けられていた。

《ソードマギカ・オンラインオープン テスト応募用紙》。そこには確かにそうでかかと書かれている。

帰りに寄った駅前の本屋でふと目に着いた雑誌に《ソードマギカ・オンラインオープン テスト応募用紙封入！》という表記を見た時、昔に咲夜と二人でゲームをした時の事を思い出した。

とても楽しくて充実した時間。もし、あの時間をまた過ごせたらそう考えたら二冊手に取りレジへ向かっていた。

「……駄目元で送ってみよっかな」

また、兄妹でゲームが出来る事を願って駄目元で挑戦してみるのも悪くないかなと考えながら、風花は部屋を出てリビングへ向かう。

そして、数日後の正午過ぎ。お昼ご飯の後片付けを済ませて、クーラーの効いた部屋でのんびりしていた所で呼び鈴が鳴った。

「はい」と返事をして重い腰を上げて玄関の扉を開くと、「お荷物お届けに上がりました」という男性配達員のテンプレート化した台詞が聞こえた。

玄関に置かれた判子を押そうとした所で、宛先が雀宮咲夜、雀宮風花の二つになっている事に気づいて啞然としてしまう。

本当に当たっちゃったよ。

風花は荷物を受け取っている最中、苦笑いしながらそんな事を考えていた。

駄目元で送ったにも関わらず、まさか二つ共当たってしまうとは。これが兄を想う妹パワーだともいうのか、と一人で感心しながら荷物を持って咲夜の部屋に向かう。

「お兄ちゃん、ちょっと開けてー」

「ああ。今開けるよ」

扉の向こうから咲夜の声が聞こえた数秒後、がちゃりと扉が開いた。

「どうした　って風花、どうしたんだその荷物……」

「話は今するから、とりあえずこれ、部屋の中置いてもいい？」

「あ、ああ」

事態が飲み込めていない様子で生返事する咲夜を気にも留めずに風花は「失礼しまーす」と軽い調子で口にしながら部屋に入ると、部屋の中央に小型のダンボール二つを置いてから定位置のベッドに腰を下ろす。

風花が腰を下ろしたのを見て、咲夜は部屋の中央に置かれたダンボールに視線を当てながら尋ねた。

「で、風花。何なんだこれは……」

「ふふん。聞いて驚いてよお兄ちゃん。この前話してたソードマギカ・オンラインのオープン テストね、二人分応募してみたらなんと二人分当たっちゃったの」

えっ へん、と中学二年生にしては育った胸を張る風花の言葉にしばらく啞然としていた咲夜は、恐る恐る尋ねた。

「……マジ？」

「マジマジ」

風花が頷くと、咲夜は「うおおおお！」と雄叫びを上げて風花を勢い良く抱きしめた。

ええっ！？ と顔を真っ赤にして慌てる風花の事等気にする事もなく、咲夜は身体でその感動を表現する。

「風花ありがとう！ まさか……まさかソードマギカ・オンラインのオープン を遊べるなんて……！ なんとお礼を言えいいか……！」

「お、お兄ちゃん。お礼はいいから離れてくれないかな……苦しいし恥ずかしい……」

「っ！ わ、悪い」

咲夜がやっと自分のしている事に気付いて慌てて風花から離れた所で、風花は深呼吸して自分を落ち着かせてから本題に入った。

「そ、それでね、お兄ちゃん。代わりについて言ったら変だけど……また私と一緒にゲームしよ。……昔みたいに」

「……！」

何時から兄妹でゲームをしなくなっただろうかと咲夜は思い返してみると、咲夜が中学三年になった頃からだからもう二年になる。その頃には咲夜はもうネットゲームの虜になっていて、据え置きハードで遊ぶ事はほとんどなくなっていた。

ネットゲームをプレイしている咲夜は本当に楽しそうで、そんな兄の楽しみを邪魔出来ないと考えた風花は、今まで咲夜に何度も言ってきた「一緒にゲームしよう」という言葉を言う事をやめたのだ。

兄の方がネットゲームの虜になったのは簡単で、中学三年にもなるとそもそも受験等の理由でゲームをやっている人が極端に少なくなるのだ。

遊ぶ相手がいない据え置きハードよりも遊ぶ相手がいるネットゲームに流れるのは当然と言える。とはいえ、咲夜は風花がいつもの様に遊ぼうと言って来ればいつでも応じるつもりでいた。

しかし、何時まで経ってもそんな気配は全くなかった。風花も周りの連中と同じ様にゲームを卒業したのだと勝手に思い込んでいた。

だが、それは違った。風花はゲームを卒業したのではなく、咲夜の邪魔をしない為に我慢していただけだったのだ。

兄妹でまたゲームで遊びたい。

ただその一心だけでソードマガカ・オンラインのオープンテストに応募した。

こう考えれば、きっと凄い競争率だったであろう数少ない枠を二通で二つ入手出来たのも納得出来る気がした。

「風花」

「……何？」

「……一緒にゲーム、やるか」

「……うんっ！」

風花が 妹が自分とゲームをしたいと思ってくれている。なら、兄としてその気持ちに応えない訳にはいかなかった。

元よりやりたくて仕方なかったゲームなのだ。それを風花とプレイ出来るんだからまさに一石二鳥。

咲夜は荷物の箱を開いて中から新品のソフトパッケージとネットワーク型の小型機器を取り出すと、白いニーハイソックスに包まれた白くて細い足をぶらぶら揺らして上機嫌な様子の風花に机の上のPCを指差して言った。

「俺は説明書とか全部読んで機器の準備するから、風花はそのPCでソードマギカ・オンラインのテイザーサイト見てお勉強してろよ」

「いい。そんな事しないでも、きつとお兄ちゃんが教えてくれるもん」

「……………」

「えへへ。だよねっ」

心を見透かされた様な言葉。

だが、それを否定する事は出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8800z/>

ソードマギカ†オンライン

2011年12月27日22時44分発行